夢の中の彼女

ぐみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
夢の中の彼女

【Ｎコード】
Ｎ２７６０Ｗ

【作者名】
ぐみ

【あらすじ】
俺は夢をみた。いつもと同じように、いずれ覚める夢を。しかしそこに現れる５年前に死別した彼女。それ以来毎日現れる彼女。一体どうして・・・

始まりの夢

俺は今悩んでいた。
その理由というのは、ここ最近毎日俺の彼女が夢の中に登場するのだ。
これだけ言うと、単純に彼女思いのいい彼氏と思われてしまいそうなものなのだが、問題なのはその彼女と5年前に死別していることだった。
確かに、死別した当初はよく夢に彼女が出てきていた。
それだけ俺は彼女を愛していた。
しばらくすると俺も落ち着いてきたのか、そんなこともなくなっていた。
それが今更・・・。
始まりは1カ月ほど前。
最初の夢は鮮明に思い出せる。
俺は、彼女と一度だけ来たことのある海岸にいた。
時間的には夕方だったと思う。
”思う”というのは、はっきり時計などで時間を確認した訳ではなくて、海が夕日のような橙色に染まっていたからだ。
しばらくすると、後ろから足音が聞こえてきた。
「足に砂が付いて気持ち悪いー」
紛れもなく彼女の声だった。
しかし夢の中で俺はそのことに何も疑問を持つことはなかった。
「だからサンダル履いてこいって言ったのに」
笑いながら振り返るとそこには、Tシャツを着た彼女の姿があった。
自分の不手際を指摘され、少しふくれっ面になりながらうるさいなぁ・・・おまたせ、という彼女に、俺は待たされた、と冗談交じりに返事しながら立ち上がる。
「今日は連れてきてくれてありがとう」

「いやいやお安い御用ですよ」
彼女の嬉しそうな横顔に、俺もなんとも言えず幸せな気持ちになった。
しかし、彼女は突然暗い表情をして口を開いた。
「でも、ここももう来れないんだよね」
夢の中の俺にはさっぱり意味がわからなかった。
「え、なに言ってるの？またいつでも連れてきてやるよ」
「無理だよ・・・」
「いやいや意味がわからない」
「来れないんだよ」
「いやだかｒ「来れないんだってばっ」
なぜか泣きそうになっているうえに、なぜか妙に機嫌の悪い彼女に、俺は段々イライラしてきていた。
「じゃあ来なけりゃいいんじゃねぇの」
ついに俺は突き放すように言ってしまった。
途端に悲しそうな顔で俯く彼女。
無言で立ち上がり、彼女に背を向けて歩き出す俺。
どうせ彼女のほうから謝ってくるだろうと考えていた。
しかし、いつまでたっても彼女が駆け寄ってくる気配はない。
後ろを向いたら彼女はいなかった。
彼女がいないことに驚いたが、彼女は先に帰ったということで、その時はなぜか普通に納得して俺も帰ることにした。
　夢から覚めると、俺はものすごく悲しくなった。
そして、夢の中で今の俺よりも悲しそうにしていた彼女のことを思い出して、益々悲しくなって、泣きそうになったが必死で耐えた。
今ここで泣いたらダメな気がして。
その日は、まぁ疲れてたのかなとか、久しぶりに彼女の夢みたな、とかで深くは考えなかった。
　そういうこともあるさ、と割り切っていた俺だったが、次の日もその次の日も彼女が出てくる夢を見た。

毎回毎回なぜか軽い喧嘩のようなことになる。
俺は彼女に対して、甘やかし過ぎなくらい優しく接していたはずだった。
そんな俺が、夢の中では異常なほど冷たい態度を取っていた。
そして夢から覚めると必ずどうしようもなく悲しい気持ちになった。
　数日後。
いよいよ気持ちの安定を失いつつあった俺は、家の中にある彼女を思い起こしそうなものを片っぱしからしまいこんでいた。
毎朝元気をもらっていた写真立てもすべて。
俺は目に見えて精気を失っていった。

報告

そして私はそっとキーボードを叩く手を止めた。

―先生の次回作にご期待ください！―

そして本文は２００文字以上言われたので文字稼ぎいきまーす

うろおおお尾尾尾おお

尾尾おお

続き所望されたので頑張ります（前書き）

でもネタ思いつかないのであと数話で終わる気がします

続き所望されたので頑張ります

それからさらに数日経ったある日。
俺はいよいよもって危険な状態になっていた。
あの日以来、毎日夢に出てくる彼女。
毎回毎回毎回毎回繰り広げられる、甘い思い出話。喧嘩。
そして訪れる、目覚めた時のどうしようもない罪悪感と嫌悪感。
食べては吐くを繰り返すだけの食事。
夢の中の彼女と、喧嘩をするのが嫌で嫌で仕方がなく、日に日に減っていく睡眠時間。
痩せこけていく頬。会社はもう行けるような状態じゃあない。
俺は精神科に診てもらう事にした。

病院へ行くのにも一苦労だった。
満足に食事も睡眠も取れない俺の体力は、目に見えて低下していた。
立てば膝が笑う。歩けば数歩で息が切れる。
朝、病院へ行くため身だしなみを整えようと、洗面台の鏡へ向かった俺が見たのは、元気だったあの頃よりも、一回りも二回りも小さく見える俺の体だった。
体中の筋肉は削げ落ち、もはや骨と皮だけかのようなありさまだった。
しかし、行動しない限りなにも変わらない。
それどころか、このままでは死んでしまうかもしれない。
俺はふら付く足並みで病院へと向かった。

病院に着いた俺が、まずはじめに思ったのは、今の俺の姿って精神病院にぴったりだよな、という事だった。
こんなくだらない事でにやついてしまった俺は、相当おかしくな

ってしまっているらしい。
いや、ひょっとしたら嘲笑だったのかもしれないが。
受付の人も、俺のような異常な見た目の人間に慣れているのか、特に驚いたような表情を見せずに、淡々と仕事をこなす。
「ではこの番号札をもってお待ちください」
という受付の人の声とともに差し出された札を受け取り、近場の椅子に腰かける俺。
翌日筋肉痛間違いない、と思えるほどの疲労感だった。
しばらくすると俺の番号が呼ばれた。
重たい体に鞭打ちなんとか診察室まで歩く。
「こんにちは。今日はどうしましたか？」
入るなり気のよさそうな先生が、妙に明るい笑みを浮かべ話しかけてきた。
「えと・・・笑わないで聞いていただけますか」
「もちろんですとも」
そして俺は話した。
あの日から今まで、5年前に死んだはずの彼女が、毎晩夢の中に現れること。
最初は甘い思い出の欠片が再生されるだけ。
でも後半になると、必ず喧嘩になってしまう。
そのせいで食事も喉を通らない。睡眠もまともに取れない。

余すとこなく話した。
この時分かったのだが、俺はこの事を誰かに聞いてほしくて仕方がなかったらしい。
俺の一人語りは２０分程にも及んだ。
その後はお医者様と、所謂カウンセリングとやらを受けた。
「今後もその夢を見続けるようだったらまた来てね」
という言葉と、よくわからないお薬の数々をいただき、今日はいったん家に帰ることになった。

それから約１カ月。
彼女は、まだ、夢の中から、去ることはなかった。
あれ以来幾度となく精神科には通ったが一向に回復の目処は立たない。
いつしか病院へ通う事もしなくなった。

そんなある日。

いつものように夢におびえつつ、眠りについた。
そしていつものように夢を見た。
当たり前のように彼女が現れる。
しかし夢の中の俺は、そのことにまるで違和感を覚えない。
夢とはそういうものだ。

その日の夢は俺の家での出来事だった。
いつものように甘い甘い思い出の欠片が、心の奥底に食い込む。
かと思いきや、今回は勝手が違った。

俺たちは初めから喧嘩腰だった。

「どうしてお前はいつもいつもっ！！！」

俺はぶちぎれていた。

どうしてこんなに怒っているのか、自分でもわからなかったが、いくら怒鳴っても心に沈むモヤモヤが晴れることはなかった。

俺が切れている間、彼女はというと小さく縮こまり、目に涙を浮かべ俯いていた。

夢の中の俺ですら、若干の罪悪感を感じずにはいられなかったが、それでも俺の怒りが収まる事はなかった。

そうしてひとしきり怒鳴り散らした俺は、今にも泣き出してしまいそうな彼女を前に、冷たい沈黙を投げかけた。

一体何分経ったのか。

しばらく彼女の、切なく苦しい表情を見つめるだけだった状況に、動きが生じた。

「ねぇ、――くん・・・私がいなくなったら寂しい？」

あまりにもいきなり過ぎるこの質問に、俺は何も答えることはできなかった。

「ねぇ、寂しい？」

もう一度、噛み締めるように、期待と不安が入り混じったような声で、尋ねる。

「な、なんなんだよいきなり。」

思わず俺は質問に質問で返してしまった。

「――くん・・・私が急に、突然、何の前触れもなく、ふっといなくなっちゃったら、寂しい？」

それでもなお、彼女は同じ質問をぶつけてくる。

「そ、そりゃあまぁ・・・寂しいけどさ」

さすがに少し落ち着きを取り戻した俺は、そう答えを返した。

「そっか・・・ありがと」

そう言うと、彼女は、嬉しそうにも、悲しそうにも、あるいはもっと別の何かを秘めているようにも見える、不思議な笑みを浮かべ、そして消えた。

朝、目を覚ました俺は何が何だかわからなかった。

あの夢はなんだ？
いつもと展開が違う。
なにかあったのか？

様々な思いが、俺の頭の中を高速で駆け巡る。

そして、俺の中に芽生えた新たな疑問。

この夢は、本当に、ただの、夢なのか？

続き所望されたので頑張ります（後書き）

頑張りました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2760w/

夢の中の彼女

2011年12月26日23時51分発行